

書評 *Ермакова Л. М.*

**Российско-японские отражения. история, литература, искусство.
(М.: Наука – Восточная литература, 2020. – 327 с.)**

杉野 ゆり

はじめに

本書では、日露文化交流史の碩学リュドミラ・エルマコーワ(Людмила Михайловна Ермакова)氏による最近20年間の多彩な論考、随筆ならびに資料が、第1部、第2部および第3部にわたって全14章のテーマに集められている。本書の表題を『日本とロシアの相互照射 歴史、文学、芸術』と試訳して、以下『相互照射』と略記したい。日本とロシアの文化交流史と比較文化論が、歴史、文学、芸術のあらゆる文献を博搜した多角的視点から、16世紀から21世紀初めまでの両国関係を包み込む世界的視野の広がりや奥行きのもと実証的に考察がおこなわれている。どのページを開いても、確かな知識と情報が所狭しと並び、興味深いエピソードと洞察、得難い知見を得ることができる。本稿の筆者は、残念ながら、書物の内容をすべて把握して大局的視点から批評ができるほどの識見を持ち合わせていない。書評では本書の内容を各章ごとに概観しつつ、取り上げられている数々のテーマの中から、筆者が特に関心を持った話題についてしばし立ち止まり、個人的な感慨を交えながら紹介したい。最初に、著者の序言に続く目次を紹介する。それぞれの部を構成する各章ごとに付けた番号は、筆者が解説の便宜上付けている。

第1部 相互照射:16世紀—20世紀初め

1. 日本の江戸時代絵画における『モスクワ大公』と『ネヴァ川に臨む河岸通り』 2. 歴史秘話(九州、ヴァチカン、ポーランド・リトアニア共和国) 3. 短編小説『シャムシル島』とプーシキン『駅長』 4. プーシキンの読書の周辺:日本と東アジア 5.「月の姫」と「竹の木」:中古文学『竹取物語』のロシアにおける運命 6. ニコライ・グミリョフと川上貞奴、相互照射と模倣 7. 谷崎潤一郎と彼の「ロシア」書簡 8. 文学の翻訳に関する覚書

第2部 ロシアにおける日本学の歴史から

1. Г. Г. Кшимидовと彼の著書『現代の日本文学史概論 1868-1906』 2. 民族学者 H. A. ネフスキー 3. С. Г. Эрисейエフと彼の『日本文学史』 4. オレスト・プレトネル教授:生涯、著作、書簡 5. A. E. グルースキナの思い出

第3部 付録

17世紀ロシアにおける日本に関する最初の手稿文献

目次からうかがえるように、エルマコーワ氏の研究分野は、日本文学の古典研究、短歌や俳句の詩学、近

現代の日本文学の翻訳と受容、美術や舞台芸術の日露交流、ロシアの日本学者たちの運命と業績の評価という多彩なテーマから成り立っている。氏の研究対象は、このように極めて広範囲のテーマにわたっているが、中でも、奈良時代の上代文学と平安時代の中古文学を中心とする古代文学、史書と史料、日本文学史を貫く伝統的詩歌に関する研究は、古文が読めて漢文が理解できるエルマコーワ氏だからこそ、本領を発揮できる専門分野である。同分野に関する氏の業績は枚挙にいとまがないほどの蓄積があるが、メンチェリャコフ(Александр Николаевич Мещеряков)氏と協力分担して、『日本書記』全30巻のうち、巻1-16、および『古事記』中巻のロシア語訳を出版していることは、日本文学の翻訳史において記念すべき業績であろう。『相互照射』に続いて同年に上梓された『天地開闢の時代: 神話、儀礼、古代日本の詩歌』(«Когда раскрылись Небо и Земля: Миф, ритуал, поэзия ранней Японии»)2巻本の内容が、氏の学風を立派に証明している。同書の第1巻には、日本神話や儀礼、信仰等に関する論考、日本詩歌の構造と特徴についての論考、古代歌謡から和歌への変遷、古代から現代にいたるまでの日本文学史概観が収められ、第2巻には、『日本書記』第1巻から第3巻までの翻訳の改訂訳、『延喜式』の祝詞、『続日本紀』の宣命、日本神話『倭姫命世紀』の翻訳が詳しい注釈とともに収録されている。

ところで、ここで紹介する『相互照射』は、日露文化交流史について高度に学問的でありながら「まだらな」トリビアルなテーマから成り立っていて、読むのがとても楽しい。読者は自身の関心の赴くまま、本書のどの章からでも読み始めることができるだろう。エルマコーワ氏によれば、本書の目的は、日本とロシアの交流を包み込む世界の国々の関係性のなかで生まれてきたところの、想像を越えるほどの内容豊かな文化事象の解明や、成果と変容のメカニズムを明らかにすることにある。以下、目次の順序に沿って内容紹介と書評を進めていきたい。

1.

『相互照射』の第1部第1章の論考「江戸絵画における『モスクワ大公』と『ネヴァ川に臨む河岸通り』」は、2つの美術作品を研究対象に論じて日本とロシアの視覚イメージの交流を明らかにしている。同論考はすでに『遙かなり、わが故郷 異郷に生きるⅢ』(中村喜和等編、成文社、2005年)に日本語で収められている。ちなみに、第1章のみならず本書全般の論考について言えることだが、出典情報は非常に詳しく資料提供者と協力者への謝意は必ず述べられているが、初出情報が注記されていないことがある。

第1章で取り上げられた2つの美術品の1つは、神戸市の市立博物館に所蔵されている重要文化財で、17世紀初頭に製作された四曲屏風の一曲を占める『モスクワ大公』である。もう一つの美術品は、18世紀後半にペテルブルクのネヴァ川と河岸を描いた漆画で、18世紀半ばにペテルブルクで製作された版画の構図を元に長崎で描かれており、クンストカーメラに所蔵されている。前者の四曲屏風は、筆者も鑑賞したことがあり、そのときは神戸市博物館の正面玄関から入ってすぐ目の壁一面を占めている絵の迫力に圧倒された。屏風には4人の王侯たち—2人のキリスト教国の王侯と敵対する2人の邪教徒の王—がそれぞれ勇まし

い騎乗姿で描かれていて、モスクワ大公はタタール汗とにらみ合っている。無名の日本人絵師によって描かれた、この重文級の絵画は、岡泰正氏の研究によれば、おそらく絵師が参考にしたであろう、17 世紀のアムステルダムで出版された世界地図の差し込み絵図までその由来をさかのぼることができる。著者は、差し込み絵図に添えられたラテン語題詞を解説している。さらに画家の奥野元昭氏の示唆に謝意を表して、『モスクワ大公』の絵の「日本化」された特徴―伊勢神宮の居玉を思わせる玉が描かれていること―を紹介し、絵画の魅力を展開している。

第2章「歴史秘話(九州、ヴァチカン、ポーランド・リトアニア共和国)」は、エルマコーワ氏が、一片の紙片から400年前の日本とポーランドの最初の出会いを明らかにした学問的新発見について論述されており、探偵小説を読むような面白さに満ちている。話は、著者が2000年2月に天草諸島でイエズス会の活動の拠点であった天草コレジオ館を見学し、同博物館で、1586年ローマで出版されたイタリア語の本の展示品、グイード・グワルチェリ『遣欧使節の報告:イタリア来訪からリスボン出航まで』に挟まれていたポーランド語の紙片に偶然目を止めたことから始まる。著者は、それまで誰にも読まれたことがなかったこの紙片を読んで、ポーランドのマチェヨフスキー司教(Bernard Maciejowski, 1548-1608)の依頼により、16世紀にローマへ派遣されていた天正遣欧使節の少年が聖書から2節を引用して和訳したこと、司教がそれをクラクフ・アカデミーに寄贈したことを知るに至る。件の和訳が今でもポーランドのどこかに眠っていないかと考え、探そうと思い立ったのは、研究で培われたエルマコーワ氏の鋭い勘とあくなき探究心であった。2001年8月、著者の粘り強い探索の結果、聖書の詩篇から取られた2節の和訳が、マチェヨフスキー司教のイニシャルと紋章をあしらった銀製のタブレットの形で、ヤギェヴォ大学図書館に保管されていたことが明らかになる。発見の背景と経過を語る著者の叙述は、日、英、露、ポーランド語は言うまでもなく西欧各国語の文献に依拠していて非常に詳しい。読者は本論考の精緻な叙述を読みながら、16-17世紀の国際情勢にタイムスリップして、天正遣欧使節をめぐる日欧の歴史的背景、遠い異国から来た基督教徒の少年たちに対してヨーロッパの人々が見せた数々の反応、マチェヨフスキー司教の生涯と彼が生きた当時のポーランド・リトアニア共和国の国家の状況等を生き生きと想像できるだろう。本論考は、著者によって書かれた先行論文「天正遣欧使節:隠された絆」(『日本研究:国際日本文化研究センター紀要』27巻、2003年)よりも、はるかに豊富な文献と挿話に満ちている。たとえば、挿話の一つを挙げると、1563年に日本へ来て1597年に長崎で亡くなったポルトガル人の宣教師ルイス・フロイスが、日本とヨーロッパの風習の相違について1585年にポルトガル語の手稿を書き遺している。手稿は、1946年にマドリッドの図書館で虫食いだらけの状態で見られ、1955年に東京で最初に出版、1998年に仏語に翻訳されてレヴィ・ストロースが序を付けている。同書が20世紀のヨーロッパの日本学者たちの思想に影響を与えたというエピソードは、大いに刺激的で好奇心をそそられ、影響を受けた一人にルース・ベネディクトがいる。

第1部第3章「短編小説『シャムルシル島』とプーシキン『駅長』」、および第4章「プーシキンの読書の周辺：日本と東アジア」はプーシキン学に関する論考である。第3章で取り上げられている作品『シャムルシル島』（«Остров Шамуршир»）は、1810年にモスクワの文芸誌に「М. М-в」というペンネームで発表されたセンチメンタリズムの系列に属する短編小説で、ロシア人将校とクリール人娘の恋が描かれている。エルマコーワ氏は、『シャムルシル島』とカラムジン（Николай Михайлович Карамзин, 1766-1826）の『哀れなりーザ』（«Бедная Лиза»）との対応関係を考察し、さらにプーシキン（Александр Сергеевич Пушкин, 1799-1837）の『駅長』（«Станционный смотритель»）と比較した場合の筋書き、語彙、文体との類似性を明らかにしてプーシキンが『シャムルシル島』を読んだ可能性を推論している。第4章は17世紀ロシアの印刷物における日本情報の紹介から始まり、次にモザレフスキー父子（Борис Львович Модзалевский, 1874-1928; Лев Борисович Модзалевский, 1902-1948）が編纂したプーシキンの蔵書リストから日本と東アジア関連の蔵書を選んで、プーシキンの同地域への関心について著者自身の検証と考察を行っている。同分野の研究には、草鹿外吉（1928-1993）の論考「プーシキンの目に映った日本」（『むうぎ』第6号、1987年）があることも補足したい。

第5章「『月の姫』と『竹の木』：中文学『竹取物語』のロシアにおける運命」は、『竹取物語』の受容についての論考である。世界における『竹取物語』の翻訳状況が紹介され、ロシアの日本学においても同作品がバリエ化も含めて翻訳と受容の対象になってきたことが明らかにされている。1900年2月27日にペテルブルクのミハイロフスキー劇場で『月から日本へ』が上演され、主役を演じたバレリーナのМ. クシェシンスカヤが思い出を書き残している。2007年に新しい振付で、オモロン名称国立オペラ・バレエ劇場でヤクートのアーティストたちによって上演され、山本郁夫が音楽指導を行い指揮している。1900年のバレエ上演に先立つこと1年前の1899年、ロシアにおける『竹取物語』の初めての翻訳『輝く姫君』が、児童文学の分野で活躍していたМ. П. ヴァシーリエフによって雑誌『ニーヴァ』第16号で発表された。同翻訳にはH. H. カラージンによる挿絵が2枚付けられたが、そのうちの1枚が『むうぎ』第31号（2018年）の表紙を飾っている。続いて、1915年にА. ツヴェチノーヴィチの翻訳『月の娘。日本の物語』、1935年には日本学者А. А. ホロドーヴィチの翻訳『竹取の翁』、1962年に日本の古典や漢詩の翻訳者で自身も詩人のВ. Н. マールコワの翻訳『竹取物語』が出版されている。著者は、以上4者によるロシア語訳の内容と形式、語彙や文体について、他言語の『竹取物語』の翻訳にも言及しながら、詳しい比較分析を行い、翻訳論を展開している。例えば、『竹取物語』で石作の皇子の求婚譚における短歌「海山の道に心をつくしはてないしのはちの涙流れき」は、ヴァシーリエフとツヴェチノーヴィチでは散文に書き換えられているが、ホロドーヴィチとマールコワは、韻文訳を試みている。ホロドーヴィチは、韻律と文体を工夫してロシアのフォークロアにならいつつエキゾチックな訳を試みて、「言語間の接点」を求めるのではなく別の「本物」を創ろうとしている。マールコワは、原文にはない語を補いながら、ロシア語で掛詞を創るという大胆な試みで短歌本来の姿を巧みに伝えている。著者は分析をふまえて、翻訳の奥義は、翻訳家の才能と日本文学への深い造詣、対象の特徴を伝えるために練磨された意識的な方法にあると結論づけている。

第6章「ニコライ・グミリョフと川上貞奴、相互照射と模倣」では、1907年パリへ音二郎とともに興行にやって来た川上貞奴(1871-1946)・ヘグミリョフ(Николай Сергеевич Гумилев, 1886-1921)が捧げた詩『私がパリで出会った日本の女優貞奴へ』(«Японской артистке Сада-Якко, которую я видел в Париже»)や、その他1910年代に書かれた日本がテーマの詩が考察の対象になっている。貞奴に捧げられた詩は2つの部分から成るが、第2部だけが詩集『真珠』(1910)をはじめ後続の出版物に収録された。同詩のなかで貞奴はグミリョフにとって未知の理解しがたい化身であり、詩人は「理解できないもの」に魅了された旅人であり、それこそ彼が想像上の東洋旅行に見出そうとしたものであった。さらに著者は、1902年3月の貞奴のパテルブルクおよびモスクワ公演の様子や人々の反応、公演にまつわるエピソードを語って、当時の新聞記事を紹介している。

第7章では、1910-1920年代における谷崎潤一郎(1886-1965)と京阪神在住のロシア人日本学者たち、および1927年に来日したコンラド夫妻との交流が語られている。谷崎潤一郎が、大阪外国語大学の言語学者プレトネル(Орест Викторович Плетнер, 1892-1970)に宛てた書簡も紹介されている。書簡は、1981年出版の谷崎潤一郎全集に入っていない未発表のもので、2018年神戸で亡くなったプレトネルの娘のスヴェトラナ・プレトネル・ハヤシが著者に託した。谷崎潤一郎は、1927年11月プレトネルに宛てた手紙で、同封の原稿—1929年レニングラードで翻訳出版された『痴人の愛』(«Любовь плуща»)の序と思われる—をコンラド先生(Николай Иосифович Конрад, 1891-1970)に転送してほしいと依頼しており、翻訳出版に至るまでの経緯が想像できる。ちなみに、著者自身が指摘しているように、この章の149頁の「オリクチノブオ」は誤りで正しくは「オリクチシノブ」である。

第8章では、20世紀初めから21世紀のロシアにおける日本文学の翻訳状況、日本文学の古典をパロディにした現代ロシア文学の作品が紹介されている。ボルヘスの作品ではアラブ・イスラームの世界や中国や古代地中海文化が異世界だが、現代ロシア文化では日本文化との交流が異世界へ通じる道になっており、著者は、この傾向を銀の時代の詩人から始まったとしている。章の最後では松尾芭蕉の俳句のロシア語訳について、誤訳が生まれる日露の文化的背景の相違が明示されている。

3.

第2部「ロシアにおける日本学の歴史から」では、ロシア革命前後の動乱期に日本学を専攻したロシア人学者たちの運命の変転と人生が、人生の最後まで学問への熱意を失わなかった彼らのたぐいまれな業績とともに語られている。第1章は「Г. Г. Ксими́довと彼の著書『現代日本文学史概論 1868-1906』」である。クシミードフ(Георгий Георгиевич Ксими́дов, 1877-1910)はウラジオストクの東洋大学日本語科で学び、1907年夏期実習で東京外国語学校の八杉貞利(1876-1966)の教えを受け、1908年東洋大学卒業後、外交官の通訳に就くが33歳に至らぬ若さで夭逝した。1909年に彼は、東京帝大の文学修士岩城準太郎(1878-1957)の著書『明治文学史』(東京、1906)を参考に『現代の日本文学史概論 1868-1906』(«Обзор истории современной японской литературы. 1868-1906». Хабаровск, 1909)を著わした。両者の著書を比較考察したエルマコーワ

氏は、クシミードフの著書が岩城の著書の単なる翻訳や書き換えではなく、岩城の研究対象以後の 1909 年の作品も取り上げており、クシミードフ自身の意見と洞察が書かれた研究書であると断言している。

第 2 章では、若いときから鬼才の誉れ高かった民俗学者ネフスキー(Николай Александрович Невский, 1892-1937)の業績に焦点が当てられている。エルマコーワ氏が日本学を志したきっかけは、『東洋』(«Восток». Academia, M.-JL, 1935)に収録されていたネフスキーの祝詞の翻訳を学生時代に読んで感銘を受けたことであり、以来、著者にとってネフスキーが遺した研究は学究の道の範であり目標であった。よく知られているように、ネフスキーは、1929 年に大阪外国語大学の職を辞して祖国へ帰国した後、スターリン体制の犠牲になり 1937 年に銃殺されている。著者は、ネフスキーが日本の神道研究で果たした先駆的な業績を語り、彼の『古語拾遺』(«Когосюн. Дополнение к древним сказаниям»)の露訳が、1926 年の英訳に先んじて行われたことを明らかにしているほか、日本古代の祝詞や歌垣について民俗学の視点からアプローチしたことを高く評価している。

第 3 章の論考は、日本語で書かれた著者の先行論文「ロシア/ソ連における日本文学の輪郭(19 世紀末期からエリセーエフまで)」(『神戸大論叢』50 巻 3 号、1999 年)を発展深化させている。同論文に多くの資料が加えられてさらに精緻な考察が行われているが、大きく分けて 2 つのテーマから構成されている。第 1 のテーマは、17 世紀から 20 世紀初めに至るまでのロシアと西欧における日本文学および文化研究に関する詳しい解説であり、日本語の先行論文には含まれていなかった、シーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866)の『日本旅行』—1854 年に 3 巻本としてロシア語で翻訳出版される—の第 2 巻における日本文学篇も考察の対象になっている。第 2 のテーマは、エリセーエフ(Сергей Григорьевич Елисеев, 1889-1975)の日本文学に関する研究について、コンラドによる日本文学研究に言及しつつ論じている。著者は、1920 年にペテルブルクで発表されたエリセーエフの論文『日本文学』(«Японская литература»)が日本文学研究の分水嶺であり、後々の文学研究の理論的哲学的基礎を築いたという、同研究の今日的意義について述べている。

第 4 章では、日本で無国籍のまま人生を終えたブレトネルの生涯が、時代状況を背景に業績および書簡に基づいて語られる。著者は、先述の故スヴェトラナ・ブレトネルーハヤシから預かったブレトネル宛ての未発表書簡を 2 つのグループに分けて公表している。第 1 グループにはブレトネルに宛てた父と弟たち一弟のひとりのオレグは日本学者一からの手紙が集められている。手紙から、ネフスキーや、1938 年に銃殺されたポリヴァーノフ(Евгений Дмитриевич Поливанов, 1891-1938)がペトログラードのブレトネル家を訪問していたことがわかる。第 2 グループには、ネフスキー、エリセーエフ、ドイツへ移住したロシア人日本学者ラミン(Мартин Рамминг, 1889-1988)、コンラドの手紙が集められている。本書で初公開された 30 通を超える書簡が、20 世紀前半に生きたロシアの日本学者をめぐる状況の解明に新たな光を与えてくれることを期待している。

第 5 章では、エルマコーワ氏が敬愛する恩師アンナ・エヴゲーニエヴナ・グルースキナ(Анна Евгеньевна

Глускина, 1904-1994)の思い出が語られている。万葉集、古今集や新古今集、短歌を研究していたグルースキナは、労農科学アカデミーより派遣されて 1928 年 3 月に半年間の予定で来日した。彼女は日本の名所旧跡を精力的に回り、ネフスキーと会い、柳田國男(1875-1962)を訪問し、佐々木信綱(1872-1963)の万葉集セミナーへ通い、日本文学研究を深めた。本書には、50 代の精悍な顔つきの柳田の横に 23 歳の若きグルースキナ女史が並んで座り、2 人で微笑む写真が掲載されている。

著者は、グルースキナ先生のもとで研鑽を続けて、恩師の 85 歳の誕生日を家族で祝う会に招かれている。誕生会のエピソードは、本書の中で筆者が最も心を打たれた場面であった。お祝いの席で、グルースキナは、突然詩を読み始めた。詩は、彼女の子供たちが幼かったころに書かれたもので、日本について、日本の風俗習慣について詠まれていた。さらに著者はこの日初めて、スターリン時代の監獄で亡くなった夫に捧げられた恩師の抒情詩を聞いた。詩は夫への愛を詠んで悲哀に満ちていた。夫が連行されてから 50 年の歳月が流れ、詩を読むグルースキナの眼には涙が光っていた…。

本書の第 3 部の付録では、『宇宙誌 1670』(«Космография 1670»)を初めとして、17 世紀後半のロシアで日本を紹介した 4 つの文献が、著者の解説とともに読者に提供されており、日本のイメージを研究するうえで有意義な資料であることは言うまでもない。

以上、第 1 部、第 2 部、第 3 部から成る『相互照射』の内容を駆け足で解説したが、筆者の書評だけで、本書の内容と魅力のすべてを伝えることは不可能である。書評で言及した知識や情報、知見は全体のごく一部であり、これ以外にも本書の随所に知識や逸話が存在して、詳しい出典情報があり、所々に著者の卓見があり、ほぼ各章ごとにまとめがある。本書で読者に供された数々の付録資料は大変ありがたく、研究を次の段階へ進展させることに寄与するだろう。本書は、発刊の翌月に出版社「ナウカ」のベストセラーに選ばれ、雑誌『日本研究』(«Японские исследования»)の 2021 年第 1 号にシチェブキン(Василий Владимирович Щепкин)氏による書評が掲載されたことを付け加えたい。シチェブキンは、広い部屋に架けられた小さい鏡に本書を瞥えて、立ち位置によって様々な事物と景色が見えるばかりでなく、近づくとあふれんばかりに充実した反映が見えてくると評価している。以上の書評を読んで、『相互照射』に関心を持たれた方は、ぜひ本書を手にとっていただきたい。

(すぎの ゆり)